

いえるでしょう。

このように仏教を非常に単純化してとらえると、変な方向にいく可能性があり、注意すべきだと思えます。仏教は緻密な情報の集合体であることを知っておいていただきたいと思えます。

### 仏教の基本原理は「無我」

では、釈迦は本質的に自分の心をみて分析した結果、どんな結論に達したのでしょうか。これはご存じの方も多いと思います。仏教の基本中の基本の原理、「無我」の思想です。仏教以前のインドでは、「我（アートマン）」が存在し、それが神（ブラフマン）と一体化することによってわれわれは救われ、永遠の幸せを得るという宗教でした。つまり、私と神が一体化するところにほんとうの救いがあるとされてきました。しかし、釈迦が現れてそれを根本的に否定します。外部にはわれわれを救ってくれる超越者はいないというのが釈迦の本質的な考え方ですから、それと一体化すべき「我」、つまり自分も存在しないことになりました。

では、それまでいわれていた個々の「自分」、「我」はどのように考えればよいのでしょうか。釈迦の結論は、それは錯覚で、われわれには「我」はないとしています。ないにもかかわらず、精神のさまざまな活動のなかで、あたかもそういうものが一個存在しているかのように錯

覚を起こし、その錯覚がわれわれのすべての不幸の元だと考えていくわけです。もちろん宗教観ですから現代の合理的、科学的な思考では納得や理解ができない面もたくさんあります。しかし、本質的には「我」は存在しないことこそが、釈迦がみつけた真理の一番奥底です。

脳科学の今流行の言葉でいうと、「我」とはクオリアのようなものでしょうか。つまり、赤というものが存在するかどうか、互いにまったく同じ感情を共有しているかどうかはわからないが、とにかく赤という色があったとき、これは赤だとしつかり感じます。ほかのものではなく、れつきとした「赤」をわれわれは実感としてとらえることを「クオリア」というようです。そして、さまざまなクオリアのなかでも一番根源的なものは、「我」です。「私」が存在し、他者がある。ここが「私」であり、「私」に含まれないものは「私でないもの」であって、外であるという。これについて、われわれ全員が同じ感覚でほんとうにとらえているかどうかは確かめようがありません。私は私で自分というものをなんとなく感じながら生活していますが、皆さん方が私とまったく同じような感覚で自分をとらえているかどうかは確かめようありません。しかし、それでもみな「私」という実感があるといえます。釈迦は、その「私」という実感、いわゆる「我」のクオリアが錯覚だといえます。ほんとうはそんなものはないが、人間という特殊な生物がさまざまな活動を行うなかで次第にそういうものがあるように思い、知らない間に身につけた錯覚だということなのです。「我」という錯覚こそが、さまざまな苦しみを生み出す元凶

だとし、その錯覚を元に戻せといひます。

二千五百年前に、ある種人類共通のクオリアを、「錯覚である」と主張した人がいることは非常に面白いと思います。それが脳科学的にどのようなに解決されるのかは私は知りませんが、たとえば、私というものが意識のなかに生まれてくるのを生物学的、進化学的に説明することは可能かもしれません。ゾウリムシやミドリムシに我があるかどうかきいてみなければわかりませんし、きいてもゾウリムシは答えてくれないでしょう。多分、外界からの刺激に対して自動的に反応する一種の機械としての存在ではあるにしても、「私はミドリムシだ」と思っているわけではないと思います。脳科学の一説に、サルから人間への進化の間に道具を使うようになって、使う私と使われる対象という区分が現れ、そこで初めて「自分」が現れてくるという説があります。私はそれを、妥当な考えだと思ひます。

そう考えれば、私たちが思っている「私」という概念は、生物の進化のなかの人間という特殊な生物種が身につけた一つ概念であるだけで、普遍的な概念ではないということになります。その錯覚を一度元に戻すとき、私たちのさまざまな苦しみは消えていくでしょう。そのかわり、我が消えることは自己にとつては非常につらい仕事です。自己否定になります。自分とは錯覚だと思ふことはなかなかできません。しかし、そういうことをしてみたらどうかというのが釈迦の仏教の一つの提案です。

## 科学の人間化

この答えは、脳科学のさまざまな定量的な実験によつて解明できるかもしれない領域で、私は大変期待しております。脳科学を中心とした科学一般の長い歴史のなかで、今次第に自分はほんとうに存在するのか、自分が思っているような世界はほんとうにあるのかという疑問が膨らんできているように思ひます。私は以前そういう本を書いたことがあり、それを「科学の人間化」という言葉で呼んでいひます。

私たちは従来、頭のなかで作上げた理想的な世界で生きていひ思ひました。しかし、科学が進歩することによつて外界の情報を取り入れていくと、その情報と、自分が思ひ込んでいる素晴らしい理想の世界との差がだんだんはつきり現れてきて、どうしてもうまくいかなくなりまひます。理想の世界が次第に下へ落とされ、主体性を失つた世界へと変わつていくことを「人間化」と呼びまひます。脳の研究もその方向へ進んでいくだらうと思ひていひまひます。

たとえば、物理学のニュートン力学の基本は、この全宇宙を神の目でみたらどのようなにみえるかということです。ですから、ニュートン力学のなかには時間の要素がほとんどはいつてきまひません。変な表現ですが、ニュートン力学の場合、すべての現象を一瞬のうちに一目で理解できるような存在をまず想定しまひます。神です。太陽があり、その周りを水星、金星が回つていひうように、神が太陽系を上から眺めていひる様子を数式で記述するのがニュートン力学です。神